

中世小歌の展開

——抒情の変遷から——

はじめに

『閑吟集』『宗安小歌集』『隆達節歌謠』の三つの中世小歌集所収の小歌には、室町後期から江戸初期までの約百年間の時間が内包されている。⁽¹⁾それらの小歌の中にはまったく同一詞章で伝えられた少例がある一方で、一首の変遷を見てとれる例も数多く存在しており興味は尽きない。筆者はかつて、「中世小歌集一考察——『閑吟集』における和歌的要素と継承小歌集におけるその展開について——」(『安田学園研究紀要』第二十三号(昭和58年2月))という拙稿を成し、小歌の変遷過程における和歌離れの実態について報告した。本稿ではまた別の視点から、中世小歌の変遷を追っていこうとするものである。

一、

『閑吟集』302番歌は「恋の中川うつかと渡ると袖を濡らいたあら何ともなのさても心や」という「自分の心を客体化し」た狭

小 野 恭 靖

義小歌である。一首の焦点はままならぬ恋に陥ってしまった作品内の主体自身の「心」に合わせられ、それを「あら何ともな」と評す自嘲的な内容となっている。この小歌は『宗安小歌集』218番歌に「恋の中川ふかと渡りて袖を濡らしたあら大事なやこれも君ゆゑ」(傍点筆者、以下同様)と継承されている。しかし、こちらでは焦点が「袖を濡らした」という事態そのものに合わせられており、それを「大事なや」とはするものの、「君ゆゑ」を用いることによって、この事態を招来させた責任は、あくまで「君」にあることを強調しているのである。自己の恋する「心」の中に沈潜していくような『閑吟集』302番歌と比較すると、「君」という相手を指示する語を導入し、訴えかける形のより積極的な詞章に変化している。『閑吟集』から「隆達節歌謠」へ継承された小歌にも同様の例が指摘できる。以下、その例を順次掲出して述べていく。

※

身は破れ笠やう着もせで掛けて置かるる(閑吟集149小)⁽⁵⁾

←

身は破れ笠、きもせですげなの君や掛けて置く。(隆達の小歌⁽⁶⁾)
 『閑吟集』149番歌は恋人が「き(来・着)」てくれずに放置されて
 る我が「身」を「破れ笠」にたとえる、所謂「三段なぞ」式^(?)の小
 歌であり、その構造は「隆達の小歌」にもそのまま継承されてい
 る。しかし、ここで注目したいのは、後者では恋人を明確に指示
 する「すげなの君」という表現を後半部に挿入して、四句仕立て
 の小歌に整えるとともに、それを主語として述語「掛けて置く」
 を導いている点である。つまり、『閑吟集』149番歌は恋人に忘れ
 られた主体自らの姿に焦点を合わせ、自照的な歌としているのに
 対し、「隆達の小歌」では相手を導入することによって焦点を変
 え、訴えかける効果を案出しているのである。

※

文は遣りたし詮方な通ふ心の物を言へかし(閑吟集292小)

←

文はやりたし伝は無し、思ふ心を夢に見よ君。(隆達の小歌⁽⁸⁾)
 『閑吟集』292番歌は遣ることのかわらない「文」のかわりに、我
 が「心」よ「物を言へ」と命令している小歌である。一方の「隆
 達の小歌」は自分の恋しく「思ふ心」を、相手(君)が「夢
 に見」るようにと命令している。主体自らの「心」に向けての語
 りかけが、対他的に展開し、相手に訴える内容に変化しているの
 である。

※

思へど思はぬ振りをしてしやつとしておりやるこそ底は深けれ

(閑吟集87小)

←

思へど思はぬ振りをしてなう思ひ瘦せに瘦せ候(閑吟集88小)
 思へど思はぬ振みせて、すき間に見る目のいとしさよや君。
 (隆達の小歌)

「思へど思はぬ振り」が眼目の小歌であるが、その振りを「し
 て」とする『閑吟集』二首と、「みせて」とする「隆達の小歌」
 では歌の構造が大きく懸隔している。『閑吟集』87番歌と「隆達
 の小歌」は、ともに相手側の「思へど思はぬ振(り)」であるが、
 一般的な恋愛の機微として享受できる前者に対し、後者では「み
 せて」「君」を用いることによって、主体自らの位置を設定し、
 相対化していると言える。また、『閑吟集』88番歌と「隆達の小
 歌」とを比較すると顕著な相違が浮かび上がってくる。すなわち、
 前者が主体のつぶやきの形式を採るのに対し、後者では一首全体
 が相手の行為から成る点に大きな隔たりを指摘できる。換言すれ
 ば、後者では前者を貫いていた自己観照から解放されているので
 ある。

以上のような継承歌における判然とした表現構造の転換の例と
 は異なるが、継承過程で相手を指示する二人称が織り込まれる例
 は他にも指摘できる。

雨にさへ訪はれし仲の月にさへなう月によなう(閑吟集106小)

←

雨の夜にさへ訪はるゝが、月に訪はぬは心変りかの君は。(隆
 達の小歌)

よし名の立たば立て身は限りありいつまでぞ（閑吟集268小）

← 立たば立て我が名、君故ならば惜しからぬ命。（隆達の小歌）

二例とも、『閑吟集』での独自の詞章が、「隆達の小歌」では相手（「君」）を前に置いての訴えかけに転化している。

次に、継承歌とは言えないものの、構想上大きな類似が認められる小歌相互の間でも、『閑吟集』所収歌とその後の小歌集所収歌とは、二人称表現の添加が指摘できる。以下に例を掲げる。

※ 来ぬも可なり夢の間の露の身の逢ふとも宵の稻妻（閑吟集139小）

← 尽期の君は来ぬもよい会者は定離の世の習ひ（宗安小歌集71）

不定型の『閑吟集』139番歌では、冒頭に「来ぬ」と主語を省略した単刀直入な形で提示されている。一方、『宗安小歌集』71番歌では七・五・七・五と整調化が進み、「来ぬ」の主語に「尽期の君」を据えている。

※

葛城山に咲く花候よあれをよとよそに思うた念ばかり（閑吟集15小）

←

君は高間の峰の白雪、よそにのみ見てやみなん。（隆達の小歌）
恋しい相手を「葛城山に咲く花」「高間の峰の白雪」と伝統和歌表現を借りてたとえるが、『閑吟集』15番歌で省略されていた主

語が、「隆達の小歌」では「君」と明示されている。

※

情ならでは頼まず身は数ならず（閑吟集117小）

←

月は濁りの水にも宿る、数ならぬ身に情あれ君。（隆達の小歌）
静かに高貴な相手の愛情を待つような『閑吟集』117番歌に対し、「情あれ」と要求する「隆達の小歌」ではその相手「君」を末尾に置いている。また、整調化も進んでいる。

※

塩屋の煙塩屋の煙よ立つ姿までしほがまし（閑吟集121小）

←

君様は明石の浦の塩屋の煙、心と振と立つにしほがそる。（隆達の小歌）

恋しい相手を「塩屋の煙」にたとえるが、「明石の浦」と地名を挿入して説明化を進めた「隆達の小歌」には、「君様」という主語も付加されている。

※

霜の白菊移ろひ易やなうしや頼むまじの一花心や（閑吟集204小）

←

扱もそなたは霜の白菊、うつりやすやなう、うつりやすやなう。（隆達の小歌）
人の心は霜の白菊、移りやすやの移りやすやの。（隆達の小歌）
『閑吟集』204番歌は前半だけでは「霜の」降りた「白菊」を描写

するのみで、単なる景物詠と変わらない。ところが、後半に至って「頼むまじ」「一花心」が登場すると、一首は人事、それも恋愛歌に変貌を遂げ、前半も「一花心」の比喩に用いられていたことが判明するという構造の歌である。一方、「隆達節歌謡」には「隆達の小歌」に二首類想歌が見られるが、前者の冒頭に「そなた」という恋人を指示する二人称の語、後者には一般的「人」という語が導入されている。歌意が冒頭から明白になった半面、言外の部分の面白みが減退しているように思われる。

※

人の辛くは我も心の变れかし憎むにいとほしいはあんはらや
(閑吟集287小)

←

君の心が变れかし、つれなき心の变れかし。(隆達の小歌)

片思いの相手を持つ主体の歌であるが、『閑吟集』287番歌では相手がつれないならば、自分も「心」変わりたいとする。この表現は『義経記』及び御伽草子『横笛物語』(慶応義塾大学本)などに見える「辛からば我も心の变れかしなど憂き人の恋しかるらん」という和歌を典拠としている。後半には俗語「あんはらや」を挿入し変化をもたせるものの、自己の「心」を見据えた和歌的叙情を色濃く残した小歌と言える。「隆達の小歌」でも同様の状況を打開させようとするが、その際「变れかし」と願望する対象は自己内部の「心」ではなく、つれない相手の「心」なのである。

二、

以上のような『閑吟集』所収小歌を起点とした変遷傾向は、『宗安小歌集』所収小歌から「隆達節歌謡」への移行過程にも見受けられる。前節と同様に例を掲出していく。

※

末の松山波は越すとも忘れ候まじ忘れ候まじ(宗安小歌集86)

←

末の松山小波は越すとも、御身と我とは千代を経るまで。(隆達の小歌)

『宗安小歌集』86番歌では、後半部分を「忘れ候まじ」という主体の強い決意の反復としている。「隆達の小歌」の後半部分は相手を指示する「御身」という語を導入し、「千代を経るまで」と心の内側の視点から遠ざかった形容を用いて終わっている。

※

しと闇におりやれ月に頭れ名の立つに(宗安小歌集141)

←

君かや闇には訪ひも来で、月にあらはれて名の立つにの(隆達の小歌)

『宗安小歌集』141番歌と比較して、「隆達の小歌」は、冒頭に「君かや」を置き、さらに「闇におりやれ」を「闇には訪ひも来で」とすることにより、相手に訴えかける力を増大させている。

※

北野の梅も吉野の花も散りこそしよずる散りこそしよずる味気

なや（宗安小歌集149）

北野の梅も吉野の花も散る、君こゝろあれ。（隆達の小歌）

「隆達の小歌」では『宗安小歌集』149番歌の「散りこそしよずろ」という典雅な表現を、「散る」と両断する他に、自らの容色の衰えを暗示して「味気なや」と自嘆する自己完結の構造を、「君こゝろあれ」として相手への哀願的な訴えかけに転換する。

※

武蔵野にこそ限りあれ身には思ひも果てもなや（宗安小歌集100）

武蔵野は名に限りあり、君を思ひの果もなし。（隆達の草歌

〈恋〉）

ほぼ同内容ではあるが、「身」という自己を示す語を用いる『宗安小歌集』100番歌に対して、「隆達の草歌」では「君」という相手を示す語が用いられており注目される。

※

身は破れ車わが悪ければこそ捨てらるれ思ひ廻せば心憂しやの（宗安小歌集171）

人はよいものとにかくに、破れ車よわが悪い。（隆達の小歌）

この例は「破れ車」のように「わ（輪・我）」が「悪」という謎かけの発想の類歌であるが、『宗安小歌集』171番歌では「捨てら」れた我が「身」のみを問題としているのに対し、「隆達の

小歌」では「人はよいもの」として相手のことにも言及している点が注目される。これは「人」ではなく「我」が悪いを強調して「我」→「輪」→「破れ車」という謎を納得させるための手法であり、この謎だけに一首の眼目があることを思わせる。『宗安小歌集』171番歌の方には「心憂しやの」に自照的要素が見受けられ、謎かけだけではない歌としての抒情性も残している。

以上の例のように小歌はその変遷の結果、多くの二人称の語を獲得していった。そしてこれに伴って、自照的な個の抒情が減退していき、相手に訴え、要求する積極的な明るい表現が増大していく。逆に継承過程の中で二人称が欠落していく例はまったく見られないのである。

三、

前節までに小歌集の推移に伴う二人称の導入の例について具体的に指摘したが、実際に三集におけるその使用状況を検討していきたい。その際、大きく参考になるのは、山内洋一郎氏「歌謡の語彙」（『中世の語彙』〈講座日本語の語彙〉4）における調査データである。氏は『閑吟集』『宗安小歌集』『隆達唱歌』（隆達節歌謡）それぞれの上位語三〇位までを表示しておられる。順位の決定は実際の出現回数（使用度数）によるが、併せてその回数に対して資料の言語量（延べ語数）を分母とした、その語の作品中に占める率（使用率）をパーミル（千分率・‰）で示し、相対化を試みている。三集それぞれの延べ語数は、『閑吟集』……三三八九（異なり語数は一一三三）、『宗安小歌集』……一六五二

(異なり語数は七八)、「隆達唱歌」……一五八(異なり語数は四九九)である。但し、このうち「隆達唱歌」はその名称から明白なように、日本古典文学大系『中世近世歌謡集』所収の百五十首本に基づくデータである。この底本は「隆達節歌謡」諸伝本の中では、もっとも早い時期の成立である「文禄二年八月宗丸老宛百五十首本」(現在、青山学院大学蔵)⁽¹⁾の明治十三年七月模写本(早稲田大学演劇博物館蔵)である。現在知られている五一五首(重出歌を除いた歌数)⁽²⁾からすれば、残念ながら三分の一にも満たない数の調査に過ぎないことになる。しかし、このデータがひとつの目安になることは間違いないく、筆者自身が山内氏と同一の基準で、五一五首すべての小歌の延べ語数を調査する力量もないので、この分については使用度数のみを示すに留め、データ処理の基本的方法は氏に大きく依拠させていただくことにする。ここでは『閑吟集』に見られる二人称の上位語「君」「和御料(我御寮)」「そなた」の三種をとりあげ、後の二集におけるその使用状況を調査した。また、同じく人稱を表わすことの多い「人」「身」を参考として併せて掲出すると下の表のようになる。

下の表からは「君」という語の圧倒的増加現象が確認できる。『閑吟集』では九例出てくるが、これは「和御料」の七例をやや上回る程度で、使用率は二・五%、順位は三〇位にも入らない(ちなみに使用度数一三で三四位となる)。「宗安小歌集」では一例で『閑吟集』より二例多いだけであるが、総歌数が少なく、延べ語数も遙かに少ない『宗安小歌集』の中での使用率は六・七%となり、順位も二二位を獲得することとなる。これがさらに

小歌集名 語	閑吟集				宗安小歌集				隆達節歌謡					
									150 首			515 首		
	使 度	用 数	使用率 (%)	順 位	使 度	用 数	使用率 (%)	順 位	使 度	用 数	使用率 (%)	順 位	使 度	用 数
君	9	2.5	—	—	11	6.7	22	—	31	26.7	—	1	81	—
和御料	7	2.0	—	—	3	1.8	—	—	0	0	—	—	0	—
そなた	3	0.8	—	—	6	3.6	36	—	11	9.5	—	13	20	—
計	19	5.3	—	—	20	12.1	—	—	42	36.2	—	—	101	—
人	61	17.0	1	—	34	20.6	1	—	21	18.1	—	2	95	—
身	42	11.7	2	—	22	13.3	2	—	21	18.1	—	2	56	—

〔注〕 順位の「—」は山内洋一郎氏「歌謡の語彙」中の調査で30位以下に位置し、正確な順位の不明のもの。

「隆達節歌謡」百五十首本（Ⅱ「隆達唱歌」）に至ると、三一例で使用率は二六・七％となり、『閑吟集』の一〇倍以上、『宗安小歌集』の約四倍で、順位は第一位におどり出るのである。「隆達節歌謡」の全歌五一五首での使用度数調査では八一となり、「人」の九五に首位の座を譲るものの、かなり高い使用率が予想される。この「君」という語については、宗祇関係の千句連歌六種、及び幽斎『衆妙集』での使用語彙と比較された山内氏が、「達ふ」「名」などとともに「小歌らしいことば」と称せられて⁽¹³⁾いる。

次に、前掲の表から「そなた」という語の増加も指摘できる。

『閑吟集』では三例見られ、使用率は〇・八％であるが、『宗安小歌集』では六例見られ、使用率は四・五倍の三・六％に増加している。「隆達節歌謡」百五十首本ではさらに増加して、一一例で使用率九・五％、順位も『宗安小歌集』での三六位から大幅に上昇して一三位となる。

一方、「和御料」は『閑吟集』では七例、二・〇％で「そなた」より使用度数、使用率が高かったが、『宗安小歌集』では三例（うち二例は反復部分にあたるので、実質的には一例少ない二例と考えることも可能）、一・八％（同、一・二％）とやや下がり、「そなた」より使用度数、使用率が低くなる。「隆達節歌謡」に至ると、「和御料」はまったく見られなくなり、その衰滅ぶりが如実に把握されるのである。「和御料」の中世語としての性格が浮き彫りにされる。

以上、三語の推移を使用率の合計によって判断すると、『閑吟集』五・三％→『宗安小歌集』一二・一％→『隆達節歌謡』

百五十首本三六・二％となり、その伸びの大きさが確認できる。なお、表に掲出した以外に、『閑吟集』に「そち」、「隆達節歌謡」五一五首中に「御身」という二人称の語各一例が存在する（後者は第二節で引用した「末の松山……」の小歌中に見える）。

四、

続いて、前節で数値処理をした三集における二人称代名詞「君」「和御料」「そなた」の、各歌の中における性格について検討を加えたい。

まず、「君」は『閑吟集』では九例であったが、その語が用いられている歌謡の種別による内訳は、狭義小歌……六首、大和節……三首となる。大和節は『宗安小歌集』『隆達節歌謡』には継承歌が見られないのであるが、その理由としては、短詞章の狭義小歌とは異なって長詞章であることが考えられる。さらに、大和節は詞章内容が典雅であり、実感をそのまま謡い物にしたような新進の狭義小歌の魅力に圧倒されたことも一因に数えあげられよう。「君」が詞章中に入っている三首の大和節133番歌、192番歌、260番歌についてもこのことが言える。いずれも伝統和歌の抒情を構成する要素としての「君」なのである。中でも、192番歌「あの鳥にてもあるならば君が往来を泣く泣くもなどか見ざらん……」には『古今和歌集』恋四・740・閑院の「相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくも見ぬ⁽¹⁴⁾」が、また、260番歌の「……心一つに君をのみ思ひ越路の海山の……」にも『古今和歌集』雑下・979・宗岳大頼の「君をのみ思ひこしちのしら山はいつかは雪のきゆる時

ある」が用いられており、和歌表現の残存が明確に指摘できる。

『閑吟集』中に「君」が用いられている狭義小歌六首のうち、2番歌「幾度も摘め生田の若菜君も千代を積むべし」と、206番歌「君来ずは濃紫我が元結に霜は置くとも」にも伝統和歌の抒情が色濃い。前者の「生田の若菜」はこの時代特に愛好された歌材であるが、『堀河百首』春・若菜・68・師類「旅人の道さまたげにつむ物はいく田のをのわかななりけり」、『夫木和歌抄』春部一・若菜・190・権中納言経平卿「とはねねばたがためとてかつの国のいくたのをにわかなつむらん」などの先行和歌に依拠し、「君」も多くの先行和歌の賀歌に類例を見つけることができる。後者の206番歌は『古今和歌集』恋四・693・よみ人しらず歌の第二句「ねやへもいらじ」を省略しただけの、まったくの和歌典拠による小歌である。また、同じく狭義小歌である84番歌「思ひやる心は君に添ひながら何の残りて恋しかるらん」は五・七・五・七・七の和歌形式の歌謡である。出典は不明ながら、その抒情も伝統和歌に近似している。一方、112番歌は「残灯隔下落梧之雨は君を思ふに非ずとも鬢斑なるべし」という吟詩を和らげた狭義小歌であり、『滑稽詩文』に「日夜思君両鬢斑」などの類句を見出すことが可能である。この小歌の「君」にも、先行する詩文の雅の抒情が継承されていると言えよう。以上のように、『閑吟集』中の「君」は先行文芸の雅の抒情を色濃く留める歌謡の中に用いられている点が注目に値するのである。

次に、『宗安小歌集』での「君」一一例を概観する。一一例のうち20・75・218番歌の三例は、「君ゆゑ」という形で使用とな

る。218番歌は第一節の冒頭に引用したが、この三例とも恋に陥った状況を「君ゆゑ」と述べ、相手に訴えかけるパターンのもので占められている。「隆達節歌謡」でも「君ゆゑ」とするものは八一例中九例にのぼる。この「君ゆゑ」も先行和歌に用例はあるものの、少例であり、勅撰集の初出は『詞花和歌集』雑上・318・曾禰好忠歌となる。その後、『千載和歌集』『新古今和歌集』に各一例ずつ見え、十三代集に一三例確認される。このような和歌での使用状況からすれば、「君ゆゑ」は中世になってわずかに用いられはしたもの、和歌的表現として一般的であったとは考えられない。また、『宗安小歌集』での「君」の使用例の中に「稀に近江の鏡山とても立つ名に曇れ君」(131番歌)のような、相手に詠え望む形が芽生えていることも、『閑吟集』中の「君」の用例とは懸隔があることを証している。この相手に詠え望む形で相手に呼びかける「君」の用例は「隆達節歌謡」においてさらに増加しているのである(具体例は第一節に例示済)。三集における「君」の具体的使用状況を分析すると、以上のようにその数値処理の結果以上に、抒情の変化が把握されるのである。

続いて、「和御料」は『閑吟集』七例すべてが狭義小歌の中に入っており、「安濃津」(77番歌)、「山雀」(148番歌)、「筑紫弓」(240番歌)、「勝事」(285番歌)などの中世的歌材や語が併せて用いられている。すなわち、きわめて当代的な口語調の流行歌謡であることが考えられる。『宗安小歌集』での「和御料」の例も「化物」(111番歌)、「山陰」(154番歌)などの俗な語と併用されている点『閑吟集』の場合と同様であるが、用例数は減少

している。

次に、「そなた」は『閑吟集』では大和節に一例、狭義小歌に二例見られるが、「我」（190番歌〈大和節〉、307番歌）、「こなた」（264番歌）という一人称の語と対照的に用いられている。

『宗安小歌集』では六例のうち、「こなた」（94番歌）、「我」（177番歌）のみが一人称と対照されているに過ぎず、「そなた」が単独で現れる例が出てくる。これは、一首のテーマが相手に移っていることを端的に意味している。中でも「いとど名の立つ折節に何ぞそなたのお目もととは」（85番歌）のような、相手を追及する歌が見え始める点が目される。

「隆達節歌謡」五一五首中の「そなた」二〇例でも、「我」と対照されている例は五例に過ぎず、「帯をやりたればしならしの帯とて非難をおしやる、帯がしならしならばそなたの肌はねならし。」といった相手の言を逆手にとった非難の歌や、「思ひよらずの腹立て顔や、うらみは数々そなたよりこそあるものを。」のような相手の態度を批判する歌、さらには「そなた故にこそ浮名の立つに……」のような相手の責任を追及する歌など、『閑吟集』には見られない真率な恋愛感情をぶつける歌群が存在する。

ここでの検討から、「君」「そなた」はその使用例の増加現象以上に、一首毎の歌の中での用いられ方の変遷に注目すべきであることがわかる。「和御料」は『閑吟集』では当代的な歌の中に用いられているが、時代の変遷とともに減少、消滅していく語であった。その結果、『閑吟集』で「和御料」が担っていた役割りは徐々に「君」「そなた」が受け持つことになるのである。¹⁸⁾

五、

以上、中世小歌三集中の小歌を具体的にとりあげて、その展開の一樣相について論じてきた。その結論として、中世小歌は自己内面を照射する沈潜した内容から、相手を引き合いに出して自己の立場を相対化したり、相手に訴え、訴えるという対他的な内容への展開を見せていった。換言すれば、小歌はその享受の場に合わせて、個の抒情から次第に遠ざかり、軽妙かつ客観的な表現を獲得していったと言える。前稿「中世小歌集一考察——『閑吟集』における和歌的要素と継承小歌集におけるその展開について——」の中で指摘した小歌の和歌離れの傾向も、これと軌を一にしているであろう。このような変遷を経ることによって、歌謡史における中世が終幕を告げることとなる。近世歌謡の嚆矢である弄斎節が三味線伴奏にかなう近世小唄調（三・四／四・三／三・四／五）を採用して、一世を風靡したのは、「隆達節歌謡」がその歌い手隆達を失って間もなくのことであった。

注(1) 『閑吟集』は室町後期の永正十五年（一五一八）の成立。

『宗安小歌集』の成立時期は不詳で、「隆達節歌謡」との先後関係も明確にはされていないが、所収小歌の内容から、「隆達節歌謡」よりは古い時代の小歌の集成と考えられている。「隆達節歌謡」には多くの歌本が伝えられているが、現在までに報告されたものの中でもっとも早い時期の歌本は文禄二年（一五九三）奥書の四種であり、もっとも遅い時期の歌本は慶長十六年（一六一一）の「元旦試筆」であ

る。『閑吟集』所収歌謡はその成立よりやや前に流行していた歌群と考えられるので、百年近い歳月の隔たりが想定できる。

- (2) 『閑吟集』の引用は北川忠彦氏校注新潮日本古典集成本による。なお、句読点は省略し、一行書きに改めた。

- (3) 北川氏注(2)掲出書の302番歌頭注。

- (4) 『宗安小歌集』の引用は注(2)に同じ。

- (5) 『閑吟集』の下の数字は歌番号を示す。また、その下の漢字一字の略号は歌謡の種別を示す肩書。「小」は狭義小歌を意味する。

- (6) 「隆達節歌謡」の引用は笹野堅校註「隆達節小歌集成」(日本古典全書『近世歌謡集』所収)による。但し、旧字は通行字体に改めた。また、「隆達節歌謡」にはその墨譜から「隆達の小歌」と「隆達の草歌」があるので、それを区別して表記する。

- (7) 鈴木棠三氏『なぞの研究』に、中世小歌に現れた「三段なぞ」の一例が示されている。

- (8) 「隆達の草歌(恋)」に「身はやりたし詮かたな、通ふ心の物を云へがな。」という、『閑吟集』292番歌、及び『宗安小歌集』23番歌「身はやりたし詮かたな通ふ心の物を言へかし」の継承歌が見られる。笹野「隆達節小歌集成」では、「文はやりたしせんかたな、通ふ心の物をいへがな。」なる小歌も掲載されているが、現在所収歌までが報告された歌本の中にはこの小歌は見当たらない。但し、高野辰之が集成した『日本歌謡集成』巻六「隆達節小歌集(新編)」にも掲載されているので、現在原本不明の「年代不詳六十四首(ひさこ)本」所収歌と推定される。

- (9) 『源平盛衰記』巻四十六にも見えるが、第二句、第三句

を「我もろ共にさもあらで」とする。

- (10) 三〇位にかかる部分の語がいくつあるか明示されているので、その次の度数の語は三〇位以下でも順位が判明する。

- (11) 拙稿「隆達節歌謡」未紹介資料三種(『国文学研究』第八十一集(昭和58年10月))参照。

- (12) 拙稿「隆達節歌謡」諸本索引(『梁塵研究と資料』第二号(昭和59年12月))参照。

- (13) 山内洋一郎氏前掲論文一六二頁。

- (14) 勅撰集の引用は『新編国歌大観』第一巻による。

- (15) 拙稿「閑吟集」と同時代文芸——三条西実隆作品との関連をめぐって——(『梁塵研究と資料』第三号(昭和60年12月))参照。

- (16) 『堀河百首』の引用は『新編国歌大観』第四巻による。

- (17) 『夫木和歌抄』の引用は『新編国歌大観』第二巻による。

- (18) 『閑吟集』77番歌「和御料思へば安濃津より来たものを俺振りごとはこりや何ごと」は「和御料」を用いて、相手を追及しているが、「隆達節歌謡」ではこの種の歌は「君」「そなた」を用いている。

(訂正) 本誌、第八十一集掲載の拙稿「隆達節歌謡」未紹介資料三種に次の誤りがありましたので、お詫び申し上げます。
訂正致します。

一三九頁下段二行目

上野九兵衛尉→下野九兵衛尉

一三九頁下段二四行目

年代不詳百三十五首本(三首)

→年代不詳百四首本(三首)